

「いじめ」がないのはなぜ？

2024・4・24 重枝 一郎

「いじめを生まないクラスづくり」を考えるにあたっては、ヒドゥンカリキュラム（隠れたカリキュラム）という、見えない教育力を働かせるための意図的なアプローチが鍵を握っている。

人は、「感情」に伴って行動が誘発される。特に生徒の年代はそれが顕著に表れる。その「感情」がプラスの「感情」であれば、その言動の「意味」を深めることにもつながる（「意味」「感情」「行動」の相互作用について【裏面参照】）。つまり、人間関係づくりは、言葉での正論で迫るより、その人の感情面に働きかけることも意識してほしいと思う。例えば、いじめ事案があったとき、「どうしてしたの？」ではなく、「どんな気持ちでそんなことをしたの？」と問いかけると、その後の展開が変わってくる。

A「どんな気持ちで・・・したの？」

B「相手が嫌がるのが楽しかったから」

A「どうして相手が嫌がるのが楽しいの？」

B「みんなもそれを見て笑っているし、盛り上がるから」

A「でもされた人は悲しい思いをしているけどそれはいいの？」

自分に向き合う経験はその人を変える。

また、いじめがないという「ないものを見る力」も大切である。いじめがある、あるものは見える。では、いじめがない、ないものをみえているか？ ないものをみるとそこには真実や感動が隠れている。いじめがない状態があるとき、それはどうしてないのかを想像させる。いじめ問題がないときに、「誰が何をしている？」「自分はどのようにしている？」「クラスのルールとマナーはどうなっている？」。それを考えさせるだけでも「いじめ許容空間」にはならない。

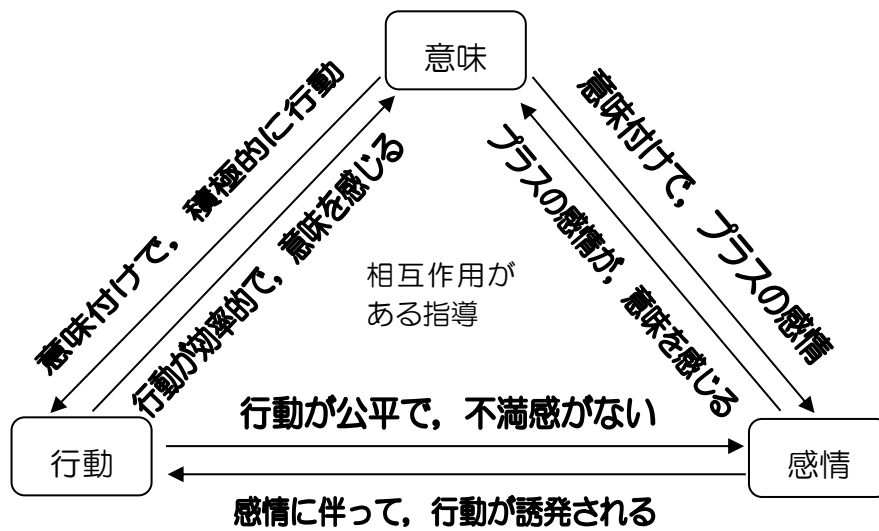
私は、学級が落ち着いている時こそ、この「ないものを見る力」を育むチャンスだと考えている。【予防・開発的生徒指導】

そして、そこで生徒が考えたことを「学級のルールとマナー」としてそこにいる全員で契約することがいじめ防止につながる。【6月再契約・9月再々契約は必要】

私は、生徒の感情にスイッチを入れることが大切だと考えている。それは、プラスの感情をもつと、行動がよい方向に積極的になるからである。そして感情は伝染する。

プラスの感情を生徒たちがどんどん醸し出し、学校にさわやかな風を吹かせていく。





- ◆ 先生方をいじめるつもりはないが(笑),「目標管理シート」の作成をお願いします。その際、校長研修だより 49号 55号 104号など参照。